高齢者の孤立とこれから

－地域コミュニティとソーシャル・サポートのあり方－

山口　由稀

筆者は、曾祖母が自宅で孤独死したことをきっかけに、高齢者の人間関係や孤独や孤立について深く考えるようになった。本論文は、日本の高齢社会、地域サポートとソーシャル・サポートの現状と課題から、今後必要な地域サポートとソーシャル・サポートのあり方について明らかにした。まず、先行研究から人間関係の変化、高齢者の社会的孤立の実態、地域コミュニティとソーシャル・サポートが高齢者に与える影響を明らかにする。次に、日本の高齢社会の現状とその背景について、高齢者人口、孤独死の統計、高齢者施設の入居者数とその背景にある問題を整理した。その上で、インタビューデータの提示・分析から、現在の地域サポートとソーシャル・サポートの課題と今後のあり方について考えている。

先行研究では以下のことが明らかとなった。SNS の普及により、人との繋がり方を容易に選択できるようになったため、人間関係を保つことが出来なくなった人は孤立するようになった。更に、社会的「つながり」が薄い高齢者は、外出の頻度が少ない。また、現在の日本社会は、日頃の生活をサポートしてくれる存在という機能的側面が乏しいことが明らかとなった。

日本の高齢社会の現状を把握するために、国勢調査などのデータを調べたところ、高齢者の人口は増加傾向にあり、全人口の約 30%を占めていた。また、孤独死者数と施設の入居者数も年々増加していることが明らかとなった。この問題の背景は、都市化による人口の集中や核家族化、平均寿命の上昇などがある。

インタビューでは、3 点の地域コミュニティとソーシャル・サポートの課題が明らかとなった。1 つ目は、家具家電の購入・設置などの生活環境の整備は、介護保険が適用されない場合があるという点である。2 つ目は、外出する頻度が少ない高齢者への課題である。3 つ目は、地域コミュニティやソーシャル・サポートが存在していても、閉鎖的に活動しているという現状である。

今後の地域コミュニティとソーシャル・サポートのあり方として、利用者からサービス料を頂き、介護施設が保険外のサービスを行うことや、「地域 SNS」といったツールを使用し、高齢者間のコミュニティを広げる必要があることが明らかとなった。